

スピリチュアリティ研究の動向

— 21世紀の心理学における課題と可能性

イリノイ州立ノースイースタン大学心理学部 准教授
Masami Takahashi (たかはし まさみ)

Profile — Masami Takahashi

テキサス州立ヒューストン大学卒業後、ペンシルバニア州立テンブル大学大学院博士課程（発達心理学）修了。2000年より現職。専門は発達心理学、老年心理学。著書は *A Handbook of Wisdom* (分担執筆, Cambridge University Press), 『宗教心理学概論』(分担執筆, ナカニシヤ出版) など。米国を中心に活動しながら日本の心理学・老年学学会にも所属し、国内外で講義・講演を行っている。様々な国や文化の人々との日常的な交流を通じ、各国の気質や研究方法の違いなどに大いに刺激を受けている。



皆さんは「スピリチュアリティ」という言葉を聞くと何を連想されるだろうか？ 実は2000年に私たちが日本でスピリチュアリティについての研究を行った際の予備調査では、ほとんどの人がこの言葉を知らなかったのである。ところが、いまや巷を歩いていても、スピリチュアリティカウンセリングやスピリチュアリティスポットなどの看板が目に入ってくる。これは、ここ10年ほどで「その筋の専門家」の方々がテレビや雑誌等で大いに活躍したおかげだが、このポップカルチャー的大流行のスピリチュアリティは心理学研究の観点からはどういう意味があるのだろうか？ そこで、ここではスピリチュアリティの意味や歴史、この概念が私たちの分野とどのような関係があるのか、さらには今後の日本における研究の課題と可能性について模索していきたいと思う。

まず、「スピリチュアリティ」(spirituality)の語源である“spirit”はラテン語の *spiritus* が仏古語を経て中世に英語の語彙にくみこまれたものだが、元来の意味は、ヒトを含む様々な生



ミケランジェロのアダムの創造(システィーナ礼拝堂)

き物の肉体的な側面に対する非肉体的な息・活力・魂のようなものと理解されていた。特にユダヤ・キリスト教文化において“spirit”は「神(父)の息」と考えられており、たとえば聖書の創世記のなかで神がアダムを創造する際に吹き込んだ「息」(ヘブライ語の *nephesh*) がこの“spirit”である。このように言語学上の長い歴史からもわかるように、欧米社会においては今日でも“spirituality”やその形容詞形である“spiritual”が日常会話のなかで頻繁に使われている。

また、この概念の心理学での歴史は意外に古く、W.ジェームスにさかのぼることができる。彼はスウェーデンボルグの影響を受けてスピリット(ソウル=魂)がわれわれの経験の中で果たす役割について強調しているが、特に *The varieties of religious experience* (1902) の中で、その神秘的な経験に関する四つの特徴を挙げている。① ineffability (禅でいう不立文字のように言葉等では表現できない直接体験のようなこと)、② the noetic quality (物事の本質を知る、または悟るような体験)、③ transiency (長時間は持続せず一時的な体験であるということ)、④ passivity (ある意味何か身に任せるような受動的になる経験)。特にここで興味深いのは、当時の神秘主義の流行 (Mind cure movements) に反発してか、ジェームスがこれらの神秘体験を定義するにあたって「宗教」や特定の「教理」に全く言及していないことである。そしてこのことが、ジェームスの文献が現在でもスピリチ

ユアリティの古典とみなされている所以ではないかと思われる。

その後スピリチュアリティは、1930年代から流行りはじめた超心理学でも中心的な概念として取り上げられるが、20世紀中盤には行動主義の影響もあり心理学の分野から排除されることになる。しかし、その後の認知革命の影響で、行動主義時代は「形而上的すぎる」と思われていた様々な概念が再び心理学の分野で真剣に取り組まれるようになった。このような動きは「全米カトリック心理学会」が1976年に全米心理学会（APA）の36部門に「宗教問題に関心のある心理学者の会」（後の「宗教心理学会」）として名称を変更して組み入れられていくことにつながり、その影響が後に数々の学会や雑誌の創刊につながっていったのだ。

ただ、これまでの流れでもわかるように、スピリチュアリティと宗教性の境界線は未だに不鮮明であり、多くの場合、スピリチュアリティは「宗教性」の同意語として扱われてきた。これは心理学の中心となっている米国において、人口の約8割が特定の宗教的教理を信じていること、またその過半数の人々が人類の始まりについて進化論よりも創世記を信じて疑わないという事実をもってすれば理解できると思う。ただ最近ではこの宗教大国である米国でさえ、全人口の20パーセント以上が自分のことを「宗教的ではないがスピリチュアルである」と認識しており、特に富裕層／教育水準の高い人々の間で、スピリチュアリティと宗教性は質の違う概念として理解されているというような研究結果も出ている。

そういう意味では、当初から意図して宗教から一線を画したスピリチュアリティに言及したエリクソンや、ピアジェ理論を取り入れ信仰（faith）に関する独自の理論を提唱したJ. ファウラーの実証研究等は、同分野のその後の展開にも大きな影響を与えてきた。現在の心理学界においてもスピリチュアリティは、宗教という比較的確立されたパラダイムの中で論じられるべきだと固執する見方がある一方、全体的な流れをみると雑誌や学会名称にスピリチュアリテ

ィを取り入れるなど、スピリチュアリティ概念そのものに対する関心が大きくなってきたように思える。たとえば、前述のAPA36部門においても、今年2012年の8月23日には、部門名称に「スピリチュアリティ」を挿入することが会員全体の82パーセントの了承を得て決定しており、今後はその正式名称が *Society for the Psychology of Religion and Spirituality* (www.division36.org) となる。

私たちは、このようなスピリチュアリティに対する関心の歴史的動向を数値的に捉えるために *PshycInfo* と *Ageline* のデータベースを使い、これまで“spirituality”をキーワードとして発表されたすべての文献（書籍、博士論文等を除く）の数を調べた（Ribaud & Takahashi, 2009）。その結果、1980年代までには数えるほどしか研究報告がなされていなかったスピリチュアリティ関連文献の年間平均数は、2000年代に入ると15倍の210件にも膨れ上がった。さらに、この間に発表された文献1758件の要約を熟読した結果、これらの研究が大まかに六つのテーマに分けられることもわかった。①スピリチュアリティの概念研究（24.1パーセント）、②スピリチュアリティの測定を目的としたもの（20.9パーセント）、③スピリチュアリティ教育に関するもの（16.5パーセント）、④スピリチュアルな介入プログラムに関するもの（21.5パーセント）、⑤コミュニティプロジェクトについての議論（4.7パーセント）、⑥スピリチュアリティに関する論評（9.3パーセント）、⑦その他の文献（3.0パーセント）（図を参照）。

このような欧米の傾向に対して日本ではどうかというと、その研究の歴史はより浅いものとなっている。前述同様、データベースを用いた

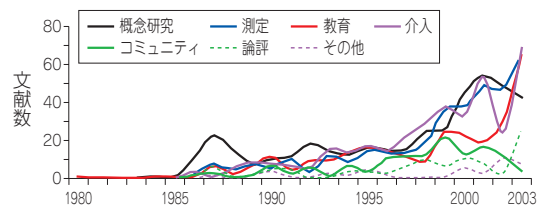


図 1980年より2003年までのスピリチュアリティに関する文献数とそのテーマ（*PsychInfo*と*Ageline*のデータベース）

歴史的動向に関する調査を日本の研究を対象に実施したが、その件数は欧米のものと比較すると非常に少なく、たとえば2003年以前すべての医学中央雑誌、国立国会図書館NDL-OPAC、社会老年学文献データベース(DIAL)で検索した場合、2003年の時点で「スピリチュアリティ」で74件、「スピリチュアル」で217件しか検出されなかった。文献の総数が少なかつたため体系的なテーマ分けはできなかったが、概括すると日本国内ではスピリチュアルケアを中心とする臨床的方法論に関する文献、特にキリスト教系の終末期医療における研究が最も多く、スピリチュアリティの理論的研究はこれまではほとんどなされてこなかったのが現状である。

このような状況の中、大衆文化レベルでスピリチュアリティがブーム化してきたわけだから、その過程でカタカナの「スピリチュアリティ」と英語で使われる“spirituality”の意味が極端にかけ離れてきてしまったのは仕方がないことだったのである。特に日本の場合はポップカルチャーの影響が大きく、スピリチュアリティは「心霊的な」や「オーラがある」という概念に近いという研究結果が出ている(Takahashi, 2011)。

また、人々が実際に「スピリチュアリティ」という概念を日常生活にどのように応用しているかに焦点を当てるため、実在の人物に関する「スピリチュアリティ」(精神性・霊性)についての評価も試みた(井出・高橋, 2002)。この研究では、日米のパイロット調査からスピリチュアルであると思われる人物を四人(ネルソン・マンデラ、マザー・テレサ、マハトマ・ガンジー、ヨハネ・パウロ二世)とスピリチュアルではないと思われる人物を四人(麻原彰晃、アドルフ・ヒトラー、ビル・クリントン、サダム・フセイン)選出し、スピリチュアリティに関する人物評価比較をした(注:このアンケート調査は2000年に行なわれたことから、選ばれた人物は当時の時代背景が反映されている)。この結果で注目すべきことは、日本における対象者が「スピリチュアルではない」とされたヒトラーとフセインに関して、米国サンプルの平均値と比べると有意に高い評価を与えていたこと

である。これは米国でのスピリチュアルという概念がマザー・テレサなどで象徴されるような「絶対的な徳」として示されていたのに対し、わが国においては必ずしもスピリチュアリティという語が肯定的なイメージでのみ用いられているのではなかったということだろう。特に米国ではスピリチュアリティのヒューマニスティックな側面(思いやりの心や利他心)が重要視されるのに対し、日本では特に若中年層で「超越的である」といった個人の能力的側面に大きな比重が置かれていることにも影響されていると考えられる。これは明らかに日本人と米国人でこれらの人物に対するスピリチュアルな側面に対する認識が違うことを示すもので、特に日本語の翻訳語である「精神性・霊性」が必ずしも英語の“spirituality”と同一の概念として用いられてはいないという事実を示すものである。

心理学の概念が日常会話の中で使われる概念と一致しないことはよくあることだが、その内容にあまり大きな隔たりがあると、比較文化研究の見地からもさることながら、その概念を含む分野自体の妥当性や必要性に疑問が生じてしまうことがある。このことが今後、日本の心理学でスピリチュアリティが研究されていくうえでの一つの大きな課題となるのではないだろうか。つまり、“spirituality”元来の意味、日本の社会学者の意味するところの「スピリチュアリティ」、日本の一般大衆レベルで使用される「スピリチュアリティ」、それぞれの意味に潜む捉え方の隔たり・溝をある程度埋めていくことを前提に、概念研究や方法論などを含めた基礎研究を中心に分野全体が前進していくことが重要だということである。さらに、ポップカルチャーでひとり歩きを始めてしまった用語を研究者たちがこぞって追いかけるより、他の対応語(例:仏性、霊性など)で置き換えて研究していくというオプションについての議論、つまりカタカナの「スピリチュアリティ」が日本の現状の研究や実践の場で果たして妥当なのか、という存在論的論議も今後必要であろうかと思う。

それでは、今後は具体的にスピリチュアリティに関して、どのような実証研究・課題が考え

られるだろうか？ 日本の場合、大多数の人々が特定の宗教を信仰していないということから非常に独特な研究課題が考えられる。もちろん先祖崇拝や仏教や神道をチャンボンにしたものが日本の宗教だという考え方もあるが、日本人の場合、大抵、本人たちが「宗教はない」とか「宗教はやってない」というわけだから、一般的には宗教的であるとされる行為や考え方（例：初詣、神のイメージ）でさえ既存の宗教的枠組みより、スピリチュアリティという宗教とは一線を引いた概念の枠組みで研究をしたほうが意味があるかと思う。それはまた、前述の「宗教的ではないがスピリチュアルである」という現在増え続けている人々の研究の先駆けになるばかりでなく、一神教であるユダヤ・キリスト教やイスラム教などについての研究では見えてこなかった、宗教性とスピリチュアリティの概念的境界線の研究などにも新たな方向性を示すことができるかもしれない。

私たちは現在、奄美群島や沖縄を中心にスピリチュアリティがどのように長寿と結びつくのかというフィールド研究を行っている（富澤 & Takahashi, 2010）。ご存知のようにこの地方では長寿の要因として、これまで遺伝子や食べ物などの要因に関しての研究がなされてきた。その一方で、この地方には独特の文化・慣習・考え方（例：沖縄のカジマヤーや奄美のカミ道）が人々のスピリチュアルな側面にどのように影響し、またそれがどのように長寿に関連するのかというような研究はされてこなかった。そこ



一見何の変哲もない道だが、地元の人々からは「カミ道」として呼ばれ、神聖な空間として崇められている（奄美大島宇検村阿室集落）。

で私たちは、「宗教はやってない」と言い切る高齢者等を対象にインタビューやシャドーイングを行ってきた。その結果、歴史、風土・気候等に育まれたスピリチュアリティが、この地方の文化、慣習伝統行事を通して具象化され、長寿者の精神的次元の安寧を深めるのではないかと、また長寿者のみならず家族や地域社会に共通している「自然や先祖とともに老いる」というスピリチュアルな感覚が、老いの過程にある種の共同作業として無意識のうちに捉えているのではないかというようなことがわかってきた。今後はこの地方独特の文化を再検討し、長寿との関連について一層深く調べていく予定である。

スピリチュアリティという概念は、その形而上的また宗教的な性質から 21 世紀の「最もつかみ所のない心理概念」といえるのかもしれない。しかし、今後、真のグローバル社会になりつつある現代において、ある程度物質的に余裕が出てきたもの、何か物足りないと感じる現代人のココロの大事な側面もまた、このスピリチュアリティなのかもしれない。今すぐにユニバーサルな概念構築は難しいだろうから、当分は比較文化等の研究も視野に入れながら柔軟で学際的なアプローチでこの概念に取り組んでいくことが望ましいのではないだろうか。

文 献

- 井出訓・高橋正実（2004）日米比較に見るスピリチュアリティと宗教性のとらえ方：具体的に示される人物評価の違いから。『北海道医療大学看護福祉学科紀要』9, 107-113.
- 富澤公子 & Takahashi, M. (2010) 奄美群島超高齢者の「老年的超越 (Gerotranscendence)」形成に関する検討：高齢期のライフサイクル第 8 段階と第 9 段階の比較。『立命館大学産業社会論集』46, 87-103.
- Fuller, C. F. (2001) *Spiritual but not religious*. New York: Oxford University.
- Ribaudo, A. & Takahashi, M. (2009) Temporal trends in spirituality research: A meta-analysis of journal abstract between 1944 and 2003. In Ellor, J. (Ed.), *Methods in religion, spirituality, and aging*, pp.13-25. Oxon, Oxford: Routledge.
- Takahashi, M. (2011) 再考：3 世代比較によるスピリチュアリティの意味。『老年社会科学』33, p.221.